

〔論 文〕

# 教師に求められる資質能力について

～教職志望学生の「教員に求められる資質能力」に関する意識を探る～

原 幸範

## The Quality and Ability of Teachers

Yukinori HARA

### Abstract

Educational institutions, schools in particular, play an important role in Society of Lifelong learning. Parents and citizens seek high quality and highly capable school teachers. A notable feature of the previous educational system is the upgradation of the qualifications required for licensing as a teacher. But, most students were quite unaware. Therefore, the variation of consciousness for the quality and ability of teachers was investigated by several questionnaires.

As a result, fourth-year students, who had had teaching practice for several weeks, listed the following points : (1) student guidance, (2) comprehension of a schoolchild, (3) skill in a special subject, and (4) class-group guidance. Second-year students who wished to pursue teaching after graduation listed the following items: (1) communication ability and (2) courteousness and decency.

**Key Words** : Lifelong learning, High Quality and Ability, Licensing system, Teacher training programs

### 1. はじめに

グローバル化, 情報化, 少子高齢化など, いま日本社会は大きな変動期を迎え, かつ, その変化のスピードはこれまでになく速くなっている. このような社会構造の変化のもと, 社会のあらゆる分野で資質能力の高い人材が求められている. 学校教育に対しても, 既存の知識継承だけでなく, 未知を創造する力をもつ次世代を育成することが求められている. 天然資源の乏しい我が国において, 生産性の高い「知識集約型」の産業構造に転換し, 国際競争力を維持していく「高い資質能力を有する人材」の育成が必須となっている.

一方, 変化の激しいこれからの社会において, 一人一人の子どもたちがそれぞれの可能性を伸ばし, 一生を幸福に, かつ有意義に送ることができるようにするためには, 一人一人が自らの頭で考え, 行動していくことのできる自立した個人として, 心豊かに, たくましく生き抜いていく基礎を培うことが重要である. このような「生きる力」<sup>(1)</sup>を, 教育を通じて育成する必要性が一段と高まってきている.

また, 教育基本法第3条には「生涯学習の理念」が挙げられている. そこには, 自己の人格を磨き, 豊かな人生を送ることができるよう, その生涯にわたって学習できる社会の実現を図ることが求められている. 生涯学習社会の実現<sup>(2)</sup>に向けた取組の中で学校教育の果たす役割は極めて大きい. 特に, 教員の与える影響が強いだけに「高い資質能力を備えた教員」が指導に当たり, 保護者や地域住民との適切な役割分担を図りつつ, 活気ある教育活動を展開することが重要である.

ところが, 教員を志望する学生の中には, 自己の資質能力を生かす意識や必要な資質能力を養うための熱意があまり感じられない者も少なくない. 教員を目指していた学生がその途中で教職を断念したり, 教員以外の道を選択したり, 教員を目指しているものの不安や悩みを多く抱えている現状がある. そこで, 教員を志望する学生の意識や熱意などを考察することによって教員養成の対策を探ることにした.

## 2. 教員の資質能力について

平成17年10月の教育職員養成審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」<sup>③</sup>において、優れた教師の条件について、以下の3つの要素が重要であるとしている。

- ①教職に対する強い情熱：教師の仕事に対する使命感や誇り，子どもに対する愛情や責任感等
- ②教育の専門家としての確かな力量：子ども理解力，児童・生徒指導力，集団指導の力，そして，学級づくりの力，学習指導・授業づくりの力，教材解釈の力等
- ③総合的な人間力：豊かな人間性や社会性，常識と教養，礼儀作法をはじめ対人関係能力，コミュニケーション能力などの人格的資質，教職員全体と同僚として協力していく能力等

教職は、日々変化する子どもの教育に携わり、子どもの可能性を開く創造的な職業である。このため、教員には、常に研究と修養に努め、専門性の向上を図ることが求められている。教員を取り巻く社会状況が急速に変化し、学校教育が抱える課題も複雑・多様化する現在、教員には、最新の専門的知識や指導技術等を不断に身に付けていくことが重要となっている。

## 3. 社会が求める教師像とその時代に生きる学生気質

時代に応じて、教師に求められるものは変化してくる。例えば、1960年代は、民主的な国家建設のための人材育成が求められ、科学技術教育の向上を図るために授業時数を増やした。それに伴って、教師の「授業力や進学達成への貢献度」に注目が集まった。1970年代は、高校進学率が90%を超えるに至り、これまでの詰め込み教育への反省から、教師には、授業だけでなく学校行事など学校生活すべてを通して、自ら考え正しく判断できる能力や自主的・主体的に対応できる能力などを育成することが求められた。ゆとり教育の推進に応じて、教師には「生徒理解力や生徒指導力など」が重視されるようになった。その後、不登校や校内暴力、いじめ問題などに対応できる「コミュニケーション能力やカウンセリング能力」<sup>④</sup>など、教師に求められる資質能力は多種多様になり、要求のレベルも高くなってきている。

一方、社会変化に応じて、学生気質も変化してきた。例えば、中・高校生の海外修学旅行が増加し、海外留学を推進するビジネスが流行していた影響もあって、学生は海外へ目を向けていた。多くの高校生が地方大学ではなく、都会の大学へ進学志望するところ、良い大学、良い就職先を目指して意欲的・積極的な学生が多かった。その後、ゆとり世代になると、現実的で堅実な生き方が主流となり「今の生活をエンジョイし、無理をしない」「まあまあな生活で良い」とする学生が目立ってきた。いわゆる「進学したい学校より、進学できる学校」であり、「就職したいところより、就職できるところ」を志向するようになったのである。これに応じて、教員を志望する学生にも「教員が勤まるだろうか」「自分の能力や性格から考えて教職には不向きではないか」などのように、『挑戦』することを避ける学生も散見するようになってきている。このような状況において、教員を志望する学生の気質を探り、「いま求められる教員の資質能力」を考えることは決して無駄ではない。

## 4. 調査の概要

- (1) 平成27年度から平成29年度まで3年間、教職を希望する学生を対象にアンケートを実施した。
  - ア. 平成27年度 2年生54名（教育創造工学科26名，その他の学科28名）・・・<図1～2>
  - 4年生16名（教育創造工学科14名，その他の学科2名）・・・<図3>
  - イ. 平成28年度 2年生65名（教育創造工学科38名，その他の学科27名）・・・<図4～5>
  - ウ. 平成29年度 2年生59名（教育創造工学科30名，その他の学科29名）・・・<図6>
  - 3年生68名（教育創造工学科41名，その他の学科27名）・・・<図7>
  - 4年生33名（教育創造工学科26名，その他の学科7名）・・・<図8～9>
- (2) アンケート調査の内容は次の通りである。

次に挙げる資質能力について

- ①必要と考える選択項目を10種類選んでください。また、②その10項目を重要度順に並べてください。

更に、③教師になるに当たって、自分のどんな「力」に自信がありますか。（5種類以上挙げてください）  
下記の〈選択項目〉以外に「教師の資質能力」があれば、それを書いてください。

〈選択項目 ～教員に求められる資質能力～〉

- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1. 教育者としての使命感    | 2. 子どもの成長・発達についての理解 |
| 3. 教科等に関する専門的知識  | 4. 子どもに対する教育的愛情     |
| 5. 広く豊かな教養       | 6. 広い視野・国際性         |
| 7. 学級経営力・集団指導力   | 8. 教育に対する誇りや愛着      |
| 9. 独創性やひらめき      | 10. 教育に対する情熱や熱意     |
| 11. カウンセリング能力    | 12. コミュニケーション能力     |
| 13. 忍耐力・持続力      | 14. 行動力・実践力         |
| 15. 分析力・洞察力      | 16. 決断力・判断力         |
| 17. 体力・健康管理能力    | 18. 協調性・協働する力       |
| 19. 言語能力・語学力     | 20. 責任感・義務感         |
| 21. 礼儀や礼節・規範意識   | 22. 教科指導力・授業力       |
| 23. 課題探求能力・課題解決力 | 24. 生徒理解力・生徒指導力     |
| 25. 表現力・発言力・発信力  | 26. 適切に叱り、誉め、激励する力  |

(3) 教職を志望していた4年生に対し、①教職を志望する学生の不安 及び ②教職以外を選択した理由 を探るため  
次のような調査を追加で実施した。

〈教職の道を選択する人〉

(問1)「教職選択」に関する決意・意欲について、その程度を示してください。

3. 必ず、絶対に、教職へ進む (強い決意・意欲)
2. できれば、可能ならば、教職へ (普通、中程度)
1. 少し考慮、やや期待、教職かも (弱い決意・意欲)

(問2) 教員になるために、今、身に付けたい資質能力を

〈選択項目〉「教員に求められる資質能力」の中からいくつか選択してください。

(問3) 教職へ進むことに不安を感じている人は、その理由を書いてください。

もし、〈選択項目〉の中に原因があるとするれば、その項目を選んでください。

〈教職以外の道を選択する人〉

(問1)「教職以外を選択」に関する決意・意欲について、その程度を示してください。

3. 必ず、絶対に、教職以外の道へ (強い決意・意欲)
2. できれば、可能ならば、教職以外へ (普通、中程度)
1. 少し考慮、やや期待、教職以外だろうな (弱い決意・意欲)

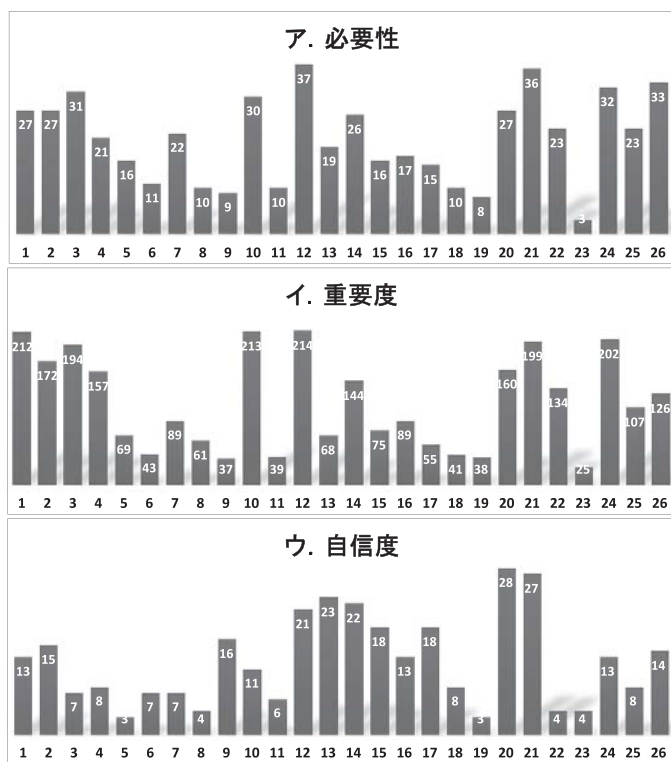
(問2) なぜ、「教職の道」を選択しないのですか。その理由を教えてください。

もし、〈選択項目〉の中に原因があるとするれば、その項目を選んでください。

## 5. アンケート調査の集計結果 及び 注目すべき部分に関する解説

表示の解説については、「ア. 必要性」とは、必要と感じている学生数である。その度数は、選択した学生数を示す。  
また、「イ. 重要度」とは、「必要であり、さらに重要である」と考えて、ポイントを加算したものである。そして、「ウ. 自信度」とは、学生が自信を持っているかどうかを表し、自信の度合いを示している。

さらに、「各項目の番号」については、上記〈選択項目 ～教員に求められる資質能力～〉に対応している。



＜図1＞教師の資質能力（平成27年度 2年生 54名）

左記＜図1＞では、1 3 10 12 20 21 24 26に注目する。

ア. 必要性 イ. 重要度 共に極めて高い値の項目は、  
（12 コミュニケーション能力）である。

ア. 必要性 イ. 重要度 共に高い値を示しているのは、

（3 教科等に関する専門的知識）

（10 教育に対する情熱や熱意）

（21 礼儀や礼節・規範意識）

（24 生徒理解力・生徒指導力）である。

イ. 重要度が急増している項目は、

（1 教育者としての使命感）である。

イ. 重要度が減少している項目は、

（26 適切に叱り、誉め、激励する力）である。

一方、学生の ウ. 自信度については、

（20 責任感・義務感）

（21 礼儀や礼節・規範意識）などが高い。

これらに続いて、

（12 コミュニケーション能力）

（13 忍耐力・持続力）

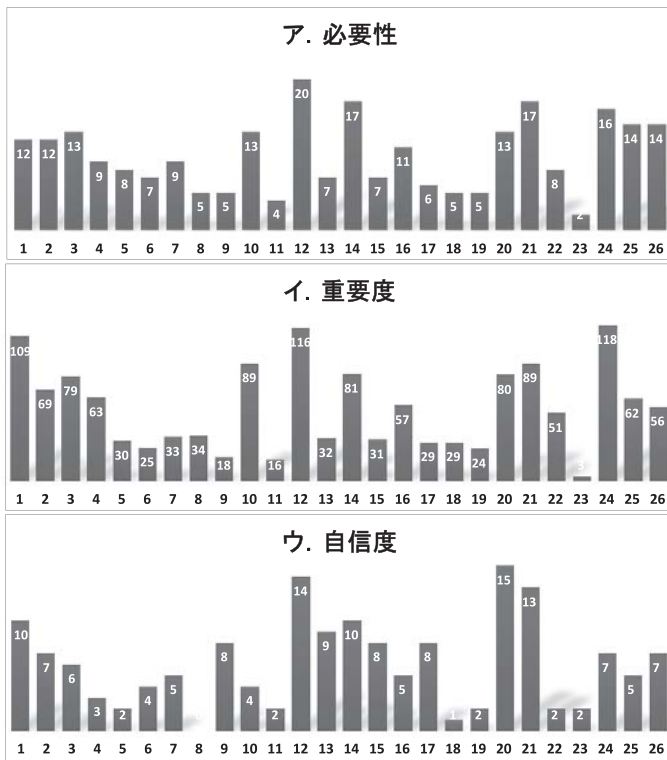
（14 行動力・実践力）なども自信度が高い。

さて、ア. 必要性 イ. 重要度 ウ. 自信度の三つすべてにおいて高いのは、（12 コミュニケーション能力）及び（21 礼儀や礼節・規範意識）であり、その逆に、すべて低いのは（23 課題探求能力・課題解決力）になっている。

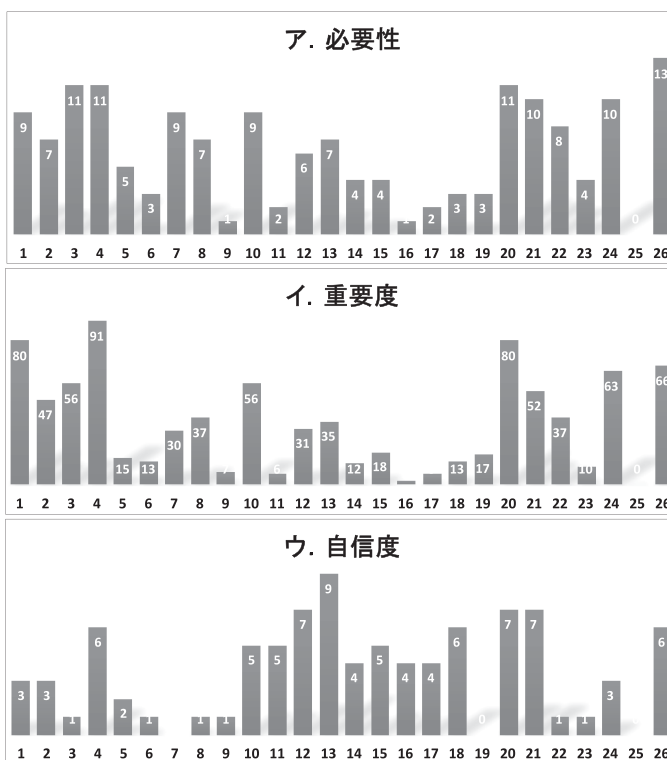
そこで、低い値を示している項目に注目すると、ア. 必要性 が最も低いのは、

（23 課題探求能力・課題解決能力）であり、イ. 重要度 が低い項目には、（6 広い視野・国際性）（9 独創性やひらめき）（11 カウンセリング能力）（18 協調性・協働する力）（19 言語能力・語学力）（23 課題探求能力・課題解決能力）が挙げられる。

さらに、ウ. 自信度 に関して低い値では、（5 広く豊かな教養）（8 教育に対する誇りや愛着）そして、（19 言語能力・語学力）（22 教科指導力・授業力）（23 課題探求能力・課題解決力）などが挙げられる。



＜図2＞教師の資質能力（平成27年度 2年生 26名）



＜図3＞教師の資質能力（平成27年度 4年生 16名）

左記＜図2＞は、＜図1＞の54名の学生の中でも教員養成を目的とする教育創造工学科のデータである。

ここに抽出された学生に関しては、教育実習を終えた4年次において同様なアンケートを実施しているので、その変化について＜図8＞で解説する。

左記＜図2＞では、1 12 14 21 24に注目する。

ア. 必要性 イ. 重要度 とともに高い値は、

(12 コミュニケーション能力) である。

ア. 必要性 イ. 重要度 共に幾らか高い値なのは、

(21 礼儀や礼節・規範意識) である。

イ. 重要度 が急増している項目は、

(1 教育者としての使命感)

(24 生徒理解力・生徒指導力) である。

イ. 重要度 が減少している項目は、

(14 行動力・実践力) である。

一方、学生の ウ. 自信度 については、

(12 コミュニケーション能力)

(20 責任感・義務感)

(21 礼儀や礼節・規範意識) などが高い。

左記＜図3＞では、1 3 4 12 13 18 20 21 24 26に注目する。

ア. 必要性 イ. 重要度 共に高い値を示しているのは、

(4 子どもに対する教育的愛情)

(20 責任感・義務感) である。

イ. 重要度 が急増している項目は、

(1 教育者としての使命感) である。

イ. 重要度 が減少している項目は、

(3 教科等に関する専門的知識)

(23 課題探求能力・課題解決力)

(24 生徒理解力・生徒指導力)

(26 適切に叱り、誉め、激励する力) である。

一方、学生の ウ. 自信度 については、

(13 忍耐力・持続力) が最も高く、

これに続いて、

(12 コミュニケーション能力)

(20 責任感・義務感)

(21 礼儀や礼節・規範意識) などが高く、

次に、

(4 子どもに対する教育的愛情)

(18 協調性・協働する力)

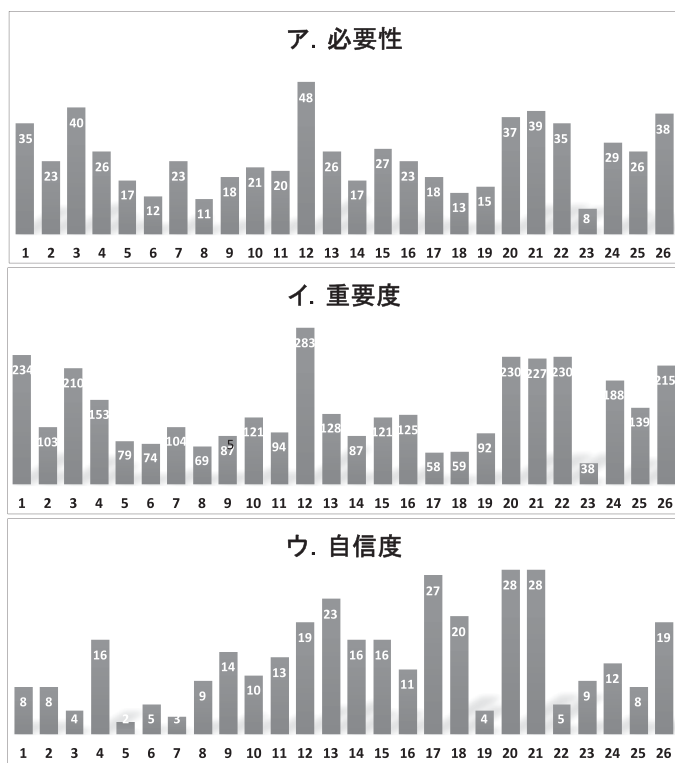
(26 適切に叱り、誉め、激励する力) である。



＜図1＞2年生対象 と ＜図3＞4年生対象 の異なる部分を比較してみる。（いずれも平成27年度のデータ）  
 イ. 重要度 で高い値を示した項目に、2年生で(12コミュニケーション能力)があり、4年生は(20責任感・義務感)を挙げている。「どのようにして子供たちとの人間関係づくりをするか」を重視している2年生に対して、教育実習を体験した4年生では「教師としての責任や義務」を重視するようになっている。教育現場の厳しさを実感した影響であろう。

ウ. 自信度 では、2年生が「行動力・実践力」などの意欲を挙げているのに対して、4年生では「子供に対する教育的愛情」や「教員間の協調性・協働する力」そして「誉め方や叱り方」など具体的項目を挙げている。

特徴的なのは、2年生、4年生ともに「礼儀礼節、規範意識」に自信を持っている点である。これは実体験からであろうか。



＜図4＞教師の資質能力（平成28年度 2年生 65名）

左記＜図4＞では、1 3 12 20 21 22 26に注目する。

右のグラフを見ると、ア. 必要性 と イ. 重要度 とのデータの値はほぼ同じ形をしている。

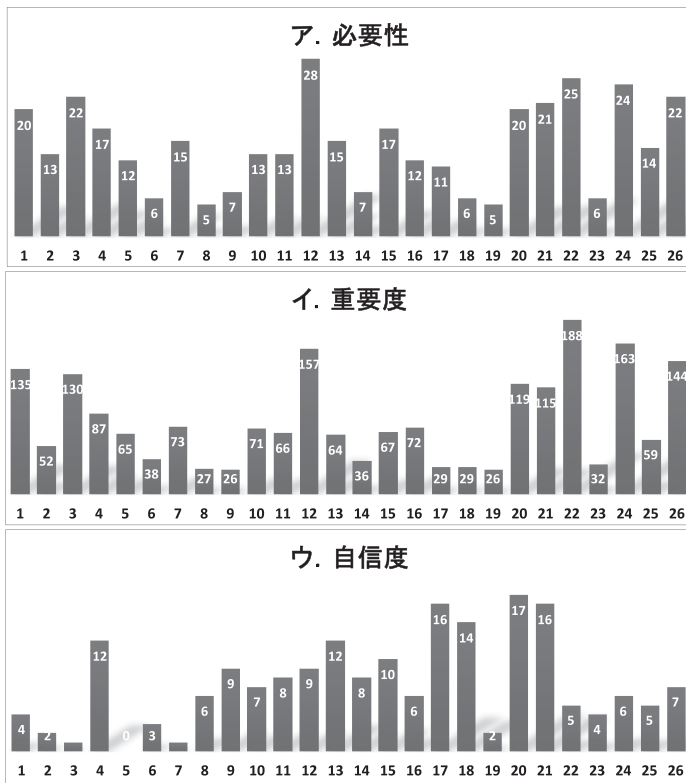
最も高いのは、(12 コミュニケーション能力) 続いて、

- (1 教育者としての使命感)
- (3 教科等に関する専門的知識)
- (20 責任感・義務感)
- (21 礼儀や礼節・規範意識)
- (22 教科指導力・授業力)
- (26 適切に叱り、誉め、激励する力) である。

前年（H27）と比較すると、『教科指導力・授業力』が加わっていることに注目したい。しかしながら、ウ. 自信度 においては、それが極めて低い。同じく「教師の使命感」や「専門的知識」も共に低い。

これは、学生が「授業の実際」に不安を抱いていることを示している。この対策としては、2年次から「専門性」を養うための指導が必要であると考えられる。

一方、(17 体力・健康管理能力)に自信を持っていることが分かるのでこの点を生かすことが大切となる。



＜図5＞教師の資質能力（平成28年度 2年生 38名）

＜図5＞は、＜図4＞の65名の中から教育創造工学科の学生のみを抽出して集計したものである。

他学科と比べて、この教育創造工学科の特徴は、ア. 必要性 と イ. 重要度 に関し次の2つが高い。

- (22 教科指導力・授業力)
- (24 生徒理解力・生徒指導力)

これは「教育実習が必要であり、教壇に立つためには、これらが絶対に必要」と考えているからであり、また、教員採用試験を睨んだ結果ともいえよう。

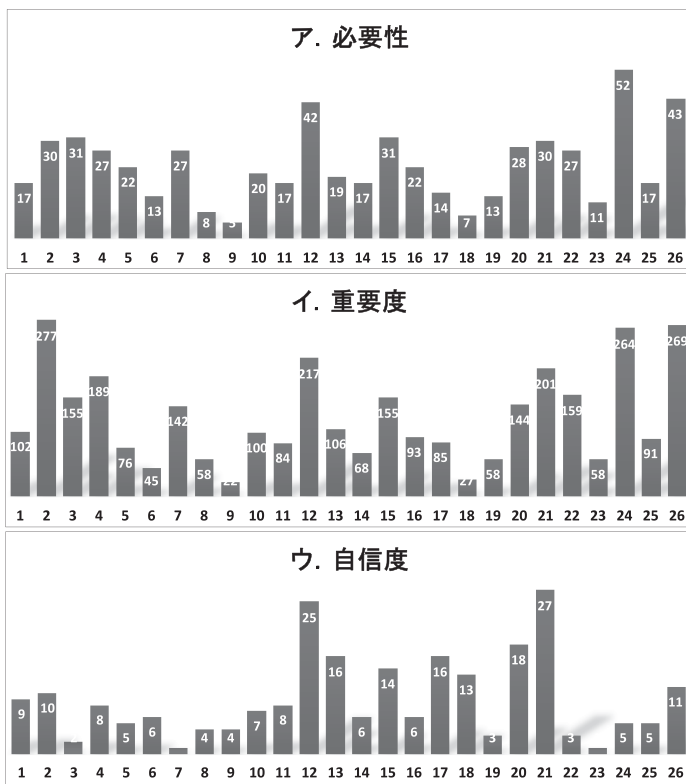
同じく、ウ. 自信度 についてこの学科の特徴は、(26 適切に叱り、誉め、激励する力) である。

これは、重要度が高い反面、いい加減では不十分と考え、自信がない、ということになっているようだ。

では、この教育創造工学科について＜図2＞(H27)と＜図5＞(H28)を比較すると、ウ. 自信度 について、左記の資料の方が

- (12 コミュニケーション能力)は低くなり、
- (17 体力・健康管理能力)は高くなっている。

この自信度が高い「体力・健康管理能力」を生かして教員に必要な能力を育成する具体策が必要となる。



＜図6＞教師の資質能力（平成29年度 2年生 59名）

＜図6＞では、2 12 21 24 26に注目する。ア. 必要性 において高い値を示しているのは、

- (24 生徒理解力・生徒指導力)

続いて、

- (26 適切に叱り、誉め、激励する力)
- (12 コミュニケーション能力) である。

イ. 重要度 において高い値を示しているのは、(2 子どもの成長・発達についての理解)

続いて、

- (26 適切に叱り、誉め、激励する力)
- (24 生徒理解力・生徒指導力)

- (12 コミュニケーション能力) であり、

子どもの成長・発達を理解することが必要であると考えている学生が多いのは、極めて特徴的である。

ウ. 自信度 においては、

- (21 礼儀や礼節、規範意識)が最も高く
- (12 コミュニケーション能力)と続いている。

礼儀や規範意識に対する自信度が高いのは、体験していることに加え、その必要性も認めているためであろう。

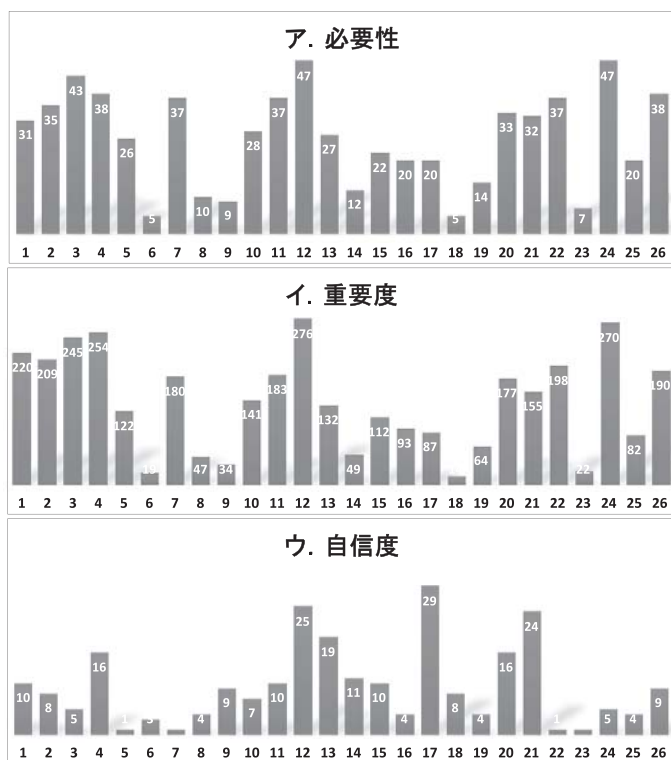
一方、すべてにおいて「コミュニケーション能力」が高い値を示していることには留意しておきたい。

ここで、いずれも2年次のデータである<図1> (H27), <図4> (H28), <図6> (H29)を時系列で比較する。

(12 コミュニケーション能力)については、「必要性」「重要度」では、常に高い値であるが、「自信度」では、若干増加傾向である。(24 生徒理解力・生徒指導力)については、「必要性」「重要度」では、H28で少し低いものの各年度とも高い値を示している。しかし、「自信度」では、いずれも低い値を示している。これは、この能力を身に付けることの難しさを表わしている。

ところで、(3 教科等に関する専門的知識)及び(22 教科指導力・授業力)に注目すると、「自信度」では、いずれの年度も低い。

2年次では、やっと専門分野の学習を始めた段階なので、これから徐々に「自信度」が高まっていくことになる。 「必要性」と「重要度」では、ある程度高い値を示しているため、学生は十分認識しているといえる。



<図7>教師の資質能力 (平成29年度 3年生 68名)

左記<図7>では、3 4 7 12 17 21 22 24 26に注目する。

(教育実習、教員採用試験を一年後に控えた3年生対象)

ア. 必要性 イ. 重要度 共に高い値を示しているのは、

(12 コミュニケーション能力)

(24 生徒理解力・生徒指導力)

続けて、

(7 学級経営力・集団指導力)

(22 教科指導・授業力)

(26 適切に叱り、誉め、激励する力) である。

イ. 重要度 が急増している項目は、

(3 教科等に関する専門的知識)

(4 子どもに対する教育的愛情) である。

ここで注目すべきは「学級経営力・集団指導力」である。学級を担当するためには、この能力は必須条件である。

一方、ウ. 自信度 について最も高い値を示すのは、

(17 体力・健康管理能力) である。

続けて、

(12 コミュニケーション能力)

(21 礼儀や礼節・規範意識) などが高い。

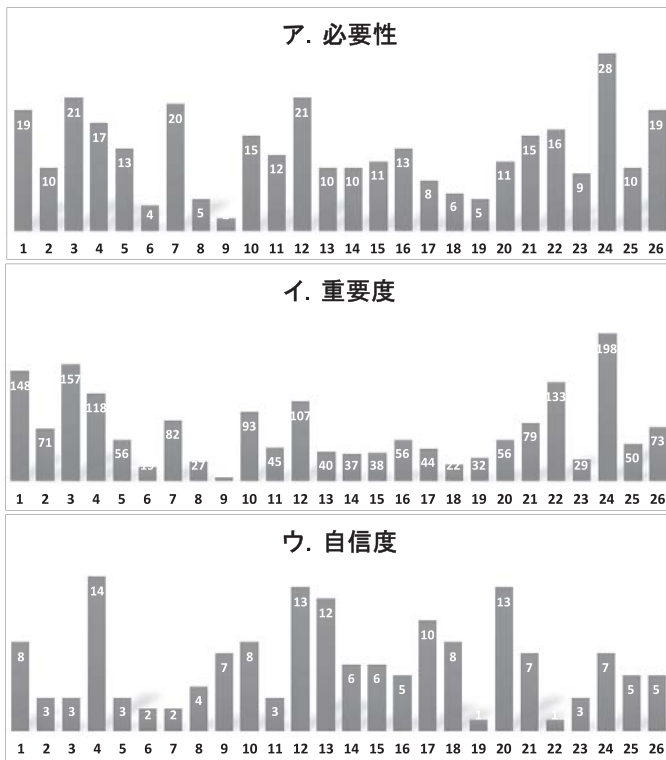
ア. 必要性 イ. 重要度 が共に高いけれど、ウ. 自信度 で極めて低いのは、必要性、重要度が高いけれど、自信度で極めて低いのは、

(7 学級経営力・集団指導力)

(22 教科指導・授業力) である。これらは

教員を志望する学生にとって極めて重要な能力である。





＜図8＞教師の資質能力（平成29年度 4年生 33名）

左記＜図8＞では、1 3 4 7 12 13 20 22 24 26に注目する。

（教育実習を終えた4年生を対象としたデータである）

ア. 必要性 イ. 重要度 共に高い値を示しているのは、

（24 生徒理解力・生徒指導力）である。

続けて、

（3 教科等に関する専門的知識）

（1 教育者としての使命感）

（22 教科指導・授業力）となっている。

これらが高いのは、教育現場で実際に体験して感じた結果であろう。授業の大切さと難しさを実感したのである。

ア. 必要性 が高いものの、イ. 重要度 がそれほど高くないのは、

（7 学級経営力・集団指導力）

（12 コミュニケーション能力）

（26 適切に叱り、誉め、激励する力）である。

一方、ウ. 自信度 について高い値を示しているのは、

（4 子どもに対する教育的愛情）

（12 コミュニケーション能力）

（13 忍耐力・持続力）

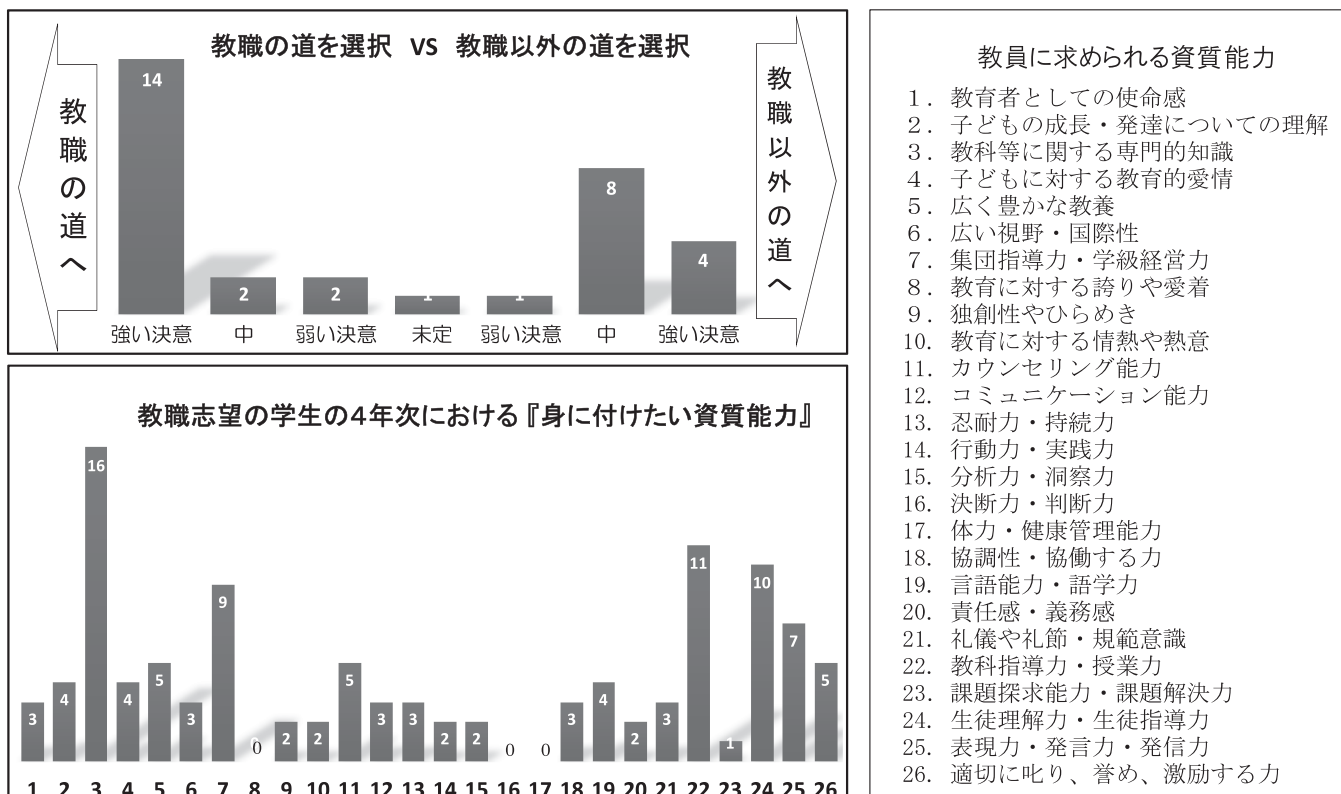
（20 責任感・義務感）であるが、これらは教育実習での実体験により勝ち取った自信であろう。

ここで、調査した集団がほとんど同じである＜図8＞（4年次データ）と＜図2＞（2年次データ）の変化を見てみよう。

自信度において（12 コミュニケーション能力）や（20 責任感・義務感）では、2年次も4年次共に高い値である。一方、4年次で自信度が増加しているのは、（4 子どもに対する教育的愛情）や（13 忍耐力・持続力）である。これは教育実習で生徒と実際に接する機会を得たことによって教育的愛情が高まり、また、授業を通して生徒に教えたことによって「忍耐力」などが必要である、と実感したためであろう。また、（21 礼儀や礼節・規範意識）が低くなっているのは、学校現場にはいろいろな個性・特徴を持つ生徒がいて、自分の常識や考えだけでは通じないことを知ったためである。生徒と一緒に過ごす時間をもって、話したり、活動したり、生徒の表情や様子を観察したことで礼儀や規範意識の意義などを再認識したことであろう。

重要度については（1 教師の使命感）及び（24 生徒理解力・生徒指導力）が、2年次でも4年次でも高い値を示している。また、4年生になって目立って高い値を示しているのは（3 教科の専門的知識）及び（22 教科指導力・授業力）であるが、これについては教育実習体験が大きく影響していると考えられる。2年次では（12 コミュニケーション能力）の方がこれより高いのに対して、4年次では「専門的知識や教科指導力・授業力」の方が高くなり、その重要度は逆転している。4年次でも「教科指導力・授業力」の自信度が低いことを考えるとき、この能力育成が重要な課題である。繰り返すことになるが、このことは教育実習を通じた実感であろう。同様に（24 生徒理解力・生徒指導力）の重要度が高いのに対して、自信度では、低い値であることから、この能力を育成することも極めて重要である。

そこで、教育実習を終えた4年生（教員免許取得予定）に対して、さらに次のようなアンケートを実施した。教員採用試験2次試験を合格した2名が含まれるものの「教職の道」を選択した学生は56%（18名）であった。その中でも「強い決意」を持つ学生は44%（14名）であり50%に満たない。一方、「教職以外の道」を選択した学生の中でも「強い決意」を持つ学生は、25%（4名）である。しかしながら、教員を目指して入学してきた学生の半分が教育関係以外へ進むことに対しては、少々反省しなければならない。かつ、有効な対策と地道な取り組みの必要性を痛感する。



調査日 H29. 10. 18. (32名)

<図9>教師の資質能力と教職志望の関係

さらにこの調査では、教職を選択する学生18名に対して「身に付けたい資質能力」のアンケートと聞き取りを実施した。

その結果を見ると（3 教科の専門的知識）が極めて高い。続けて（22 教科指導力・授業力）も高い値を示しているが、これらは、教育現場で実際に授業をする過程で徐々に身に付いてくる。それは、教材研究をして授業を実施し、生徒に教えることによって、教師自身が改めて学び直しをすることになるからである。つまり、『教えることは学ぶこと』なのである。

次に高い値を示しているのは（7 集団指導力・学級経営力）と（24 生徒理解力・生徒指導力）である。教師になれば必ず学級担任をすることになり、また、そこに教職の魅力も存在する。集団の扱い方が学級経営に結びつくのであり、その力量に応じてクラスの雰囲気も異なってくる。生徒ひとり一人をしっかり観察して、その子の個性を認めて伸ばしていくことが教育であるからこそ、生徒理解力や生徒指導力は教師にとって必須条件になる。しかし、これは教師自身の個性とも連なってくる。リーダーシップを発揮する教師もいれば、フォロワーシップがうまい教師もいる。いろいろな教師が存在することが教育の豊かさに通じる。教師それぞれのスキルアップと同時に、教師が集団として生徒ひとり一人を大切に教育が求められている。これら集団指導力や生徒指導力などは学校現場で他の教員と一緒に教育に携わる中で徐々に鍛えられていく。

三つの項目（8 教育に対する誇りや愛着）（16 決断力・判断力）（17 体力・健康管理能力）はすべて数値が零である。

「教育への誇り・愛着」は、これはもう既に身に付いているということであろうか。「決断力や判断力」は、当面の必要度が低いということであろうか。「健康管理能力」は、彼らがまだまだ若いからいえることであろうか。聞き取るべきであった。

この調査では自由に述べてもらったが、まずは「教職以外の道」を選択した学生の理由にはどのようなものがあるのだろうか。次に述べてみると、

- ① アルバイトをする中で、お客様との関わりに遣り甲斐を感じ、生徒や保護者を相手にするのではなく、お客様を相手にする仕事をしたいと思うようになったから。お客様をサポートし、お客様の利益を上げ、自分たちの利益も上がることに興味を持ったから。
- ② 地域貢献につながる仕事をしたいと強く思うから。

- ③ エンジニアになるという夢を実現させたいので、教職以外を選択しました。しかし、教師という職業への憧れもあるので、将来は教職に進むことも視野に入れていきます。
- ④ 生徒を育てるのではなく、自分自身が成長したいし、もっと上へいきたい。
- ⑤ 今の教職の現状を知り、自分の思い描いていたこととは違う、と感じたから。
- ⑥ 教育をやっても、結果として目に見えるわけではないから。
- ⑦ 教員になって、人を教育していけるような性格ではない、と思ったから。
- ⑧ 教育実習で、担当の先生からのアドバイスは全くなく、ダメと言われてばかりでどうしたらいいのかわからなくなり、自信を失くしたから。
- ⑨ 教育実習を経験して自分の無力さやハングリー精神の少なさを感じ、人として経験不足だと感じたから。
- ⑩ 教育実習を通して、自分が不向きであることがわかったから。子供と接することは好きだけど、教育者としてやるには程遠いと感じた。
- ⑪ 勤務時間の長さには驚いた。
- ⑫ 中学校で教育実習をしたが、若い先生が朝7時から夜10時まで当たり前のように働いていたが、今の自分にはとても厳しいと思ったから。自信がない。
- ⑬ 教員とはいえ、正規に採用されない限り、生活が安定しないから。
- ⑭ 専門的知識や教科指導力、授業力が足りず、これらが教員にとって最低限必要だと思った。
- ⑮ 専門的知識、広く豊かな教養、広い視野、生徒理解力や生徒指導力などが足りないと感じた。専門の知識を社会に出た多くの人達から学びたいから。生徒を理解するなら、まず大人を知っておきたいという考えである。

以上であるが、教職以外の分野へ意欲的に飛び立とうとする学生がいる一方で、教員としての資質能力の「授業力」や「専門的知識」、「生徒指導力」等の不十分さや自信のなさが挙げられている。また、勤務時間の長さなど労働環境の問題も一因となっている。

では、教職の道を選択する学生の意見はどうだろうか。同様に勤務時間や労働過重などもあるが、やはり専門的知識の不足や採用試験についての発言も見られた。次にその主なものを挙げてみよう。

- ① 時間外労働の報道などを耳にするが、どれほど深刻な状態なのか不安である。
- ② 「教員の働き過ぎ」をよくニュースで見かけるが、新任でその忙しさについていけるか不安。
- ③ 教員採用試験の難しさに不安。
- ④ 講師をしながら教員採用試験の勉強をすることができるのか不安である。
- ⑤ 教育実習や教員採用試験で自分の勉強不足に気づいた。また、授業の難しさ、教員という仕事の忙しさ、そして、勉強する時間や教材研究をする時間の確保が難しいと感じた。生徒に分かりやすい授業ができるかどうか不安である。
- ⑥ 教育実習で改めて教員の仕事の大変さを知ることができた。それでも、教師と生徒、教員間における楽しさもあり、遣り甲斐がある仕事と感じた。
- ⑦ 勉強の能力が足りないことや休みがないこと、授業力がないこと等が不安である。
- ⑧ もっと専門的知識を身に付けなければならない。いろいろな考え方や見方など広い視野が必要。
- ⑨ 自分には「広く豊かな教養」がないので、生徒の様々な質問に対応できるか不安です。
- ⑩ やってみたいことには、何が不安かもわからないので、できることは全部一生懸命やろうという心構えです。
- ⑪ 教育実習のときもそうだったが、授業力や生徒理解力というのを担当の先生を見て学んだが、それができるか不安だ。教育実習中は躓いてばかりだったから。
- ⑫ 専門的知識をもっと身に付けておかなければ、生徒の質問に答えられるか不安。クラス30人以上を見ていけるかも不安。
- ⑬ 将来、家庭と両立しながらできる職業なのか不安です。実習先でも女性の教員が夜遅くまで残っていて、家庭もあり、いつ家庭の時間を作っているのだろうか、と不安になった。
- ⑭ 教育実習は楽しかったけど、それ以上に、先生方の忙しさを実際に見て、今の生活と大違いで不安になった。クラス担任になり、どのように学級経営していけばいいのかわからない。
- ⑮ 教職へ進む際、専門的知識や教科指導力の能力がないと授業が成立しないことが不安。
- ⑯ 教育現場での知らないことが多すぎるのが一番不安である。
- ⑰ 教師としての考え方・見方がまだできていない。知ろうとする努力が必要。

- ⑱ 専門的知識が足りなく、間違っただけを発言してしまうのではないかと、生徒とうまくやっていけるか、保護者も同様であり、これらが不安である。
- ⑲ 一年間を通して、範囲を教えきれぬか、時間が足りないのではないかと心配である。

## 6. むすび

教職を目指す学生にとって「教員に求められる資質能力」がどのようなものであるかを考えることは重要である。特に、「教壇に立つ」ためには、学生自身が自信をもつことは極めて重要であり、教職を志望する学生が、自分の持つ個性や能力に気づき、それを磨き上げることが必要である。教職にはいろんな魅力を持つ教師が求められる。いろいろな教師が多様な子供たちの個性・能力を尊重して、生徒に寄り添い、共感し、ともに成長することが求められる。同じような教師ばかりでは多様な子供たちを育てることはできない。つまり、教師は自己の資質能力を冷静に判断し、それを生かしつつ、子供の成長に対応していくことが求められる、ということである。資質については「無いものに悲観せず、あるものを伸ばす」のであり、能力については、着実に身に付けることが大切となる。

また、教育では、教師集団の組織力も大切となる。教師がお互いに協働して生徒を育てることが必要である。そのためには教師ひとり一人の力量を高めることは勿論だが、組織力を高めることも重要である。教師の「連携する力」も大切であり、「組織連携力」という言わば、協調性や社会性、指導力や統率力、共同意識なども重要となる。つまり、教師には三つの力である「教科指導力」「生徒指導力」そして、この「組織連携力」をもつことが大切である。そこには当然「教師に求められる資質能力」が大きくかかわる。教員志望の学生には、この『教師の資質能力』とはどのようなものか、どれだけ重要か、どのようにして身に付けるか、などを考えさせることによって、教員になる意欲や意識が高まっていくものと考えている。

2年次からは積極的に専門教科力を高めることが必要であり、そのためには『教えるための専門教科学習』をするようにしたい。また、3年次から教育実習に臨むまでは、生徒理解力を高めるために必要な『生徒の実践的観察』を実施したり、模擬授業をできる限り多く実施したり、生徒指導での叱り方や誉め方のロールプレイングをすることが求められる。また、教育実習を終えた4年生に対しては『教科指導力を高める学習』と『集団指導力を高めるワーク』が必要と考えている。

今後は、入学した1年次から「教員に求められる資質能力」のアンケートを実施して、かれらが教員をどのように捉えているのかを知りたいものである。また、各学年で調査を繰り返すことにより、時系列に意識の変化を捉えることもできよう。そして、入学年度によって、教員を志望する学生の気質も捉えることができる。特に、教科指導力や生徒指導力などの教員に必須の能力について分析することは無駄ではないと考えている。継続して調査することで一層分析を深めていきたい。

また、この資質能力の中で、例えば、コミュニケーション能力とはどのような能力なのか、カウンセリング能力とはどうか。そして、生徒理解とは何か、規範意識とは何か、教師の使命感は如何にして生まれるのか等を改めて考え直してみたい。

## 参考資料等

- (1) 中学校学習指導要領総則編（平成20年9月）文部科学省
- (2) 生涯学習社会の実現第2期教育振興基本計画（抄）（平成25年6月）文部科学省
- (3) 教育職員養成審議会第3次答申（平成17年10月）文部科学省教員養成部会
- (4) 教員に求められる資質能力に関する関連答申（平成18年7月）中央教育審議会